様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：４２６９４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００７５４

研究課題名（和文）サハリン在留日本人とその家族の越境のライフストーリー

研究課題名（英文）Life Stories of Japanese Residents in Sakhalin and their Families Crossing Borders

研究代表者
佐藤　正則（SATO, Masanori）

山野美容芸術短期大学・その他部局等・特任准教授

研究者番号：５０６４７９６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本に永住帰国したサハリン残留日本人と、その家族にライフストーリーインタビューを継続的に行った。そして、複言語的な言語生活経験という観点から分析、考察を行った。研究の結果、日本社会で充実した生活を営むためには、社会への適応や日本語の習得だけではなく、他者と助け合い、支え合いながら共に生きること、すなわち価値としての複言語・複文化能力が必要であることが明らかになった。また、複言語話者における仲介の観点からは、地域社会との関係性の構築、複言語・複文化を資本とした社会参加の場の重要性も示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
サハリン残留日本人の日本語教育学としての研究は本研究が初めてである。中国残留日本人研究の蓄積はあるが、サハリン帰国者の複言語・複文化についての研究は緒についたばかりである。本研究では、サハリン帰国者の複言語・複文化における主観的な現実の一端を示すことができた。また、複言語・複文化における仲介の意義も確かめることができた。さらに、本研究ではアーカイブズの資料作成も行っており、貴重な声の記録という点でも意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, life-story interviews were conducted on an ongoing basis with Sakhalin residency Japanese who have returned permanently to Japan and their families. It was then analysed and discussed from the perspective of plurilingualism life experiences. The research revealed that in order to lead a fulfilling life in Japanese society, it is necessary not only to adapt to society and learn Japanese, but also to live together with others, helping and supporting each other, in other words, to have the ability to be plurilingual and pluricultural as a value. From the perspective of mediation among speakers of plurilingualism , it was also possible to show the importance of building relationships with the local community and the importance of places for social participation that capitalise on plurilingualism and pluriculturalism.

研究分野：日本語教育学

キーワード：サハリン残留日本人　複言語・複文化　ライフストーリー研究　価値としての複言語・複文化能力　仲介活動　地域社会　社会参加　アイデンティティの更新

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究はサハリン残留日本人とその家族のライフストーリー研究である。サハリン残留日本人とは、戦後、ソビエト連邦統治下のサハリン（樺太）からの二度の集団引き揚げにおいても何らかの理由で帰国できず、サハリン残留を余儀なくされた日本人を指す。ソビエト連邦崩壊以降、一民間団体の努力によって、1990 年代から現在まで、残留日本人とその家族の永住帰国は続いている。

日本に永住帰国したサハリン残留日本人とその家族（子や孫等）の文化、言語使用は非常に複雑であり複言語、複文化的である。ロシア語や韓国語あるいは日本語でコミュニケーションをとりつつ韓国やロシアの文化的アイデンティティを持つ家族も多い。世代によっても日本語との関係性は異なる。日本に永住した家族―第二世代第三世代は、幼い頃日本語を使用していた経験のある第一世代とは異なり、日本語は永住後日本で学ぶ第二言語である。

このように、サハリン残留日本人は 1990 年代になってその存在が知られるようになった。しかしその後も「サハリン残留〈日本人〉は「中国残留邦人等」という付属的な問題として扱われる不可視の存在」（玄・パイチャゼ 2016）であり続けた。それは日本語教育の領域でも同様である。中国残留邦人の研究は相当数あるが、サハリン残留日本人の研究は管見の限りでは見当たらない。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は、日本語教育学（ことばの教育）の視点から、サハリン残留日本人家族における越境の経験、複言語、複文化的な言語生活の経験をライフストーリー・インタビューによって記録し明らかにするとともに、調査結果から、サハリン残留日本人家族二世三世の具体的な日本語教育システムを構築し、その上で複文化、複言語性を活かした生涯教育としての日本語教育カリキュラムを構想していくことであった。

しかし、研究の過程で、サハリン帰国者の言語教育支援は、日本語教育のカリキュラム構築というよりは、むしろ複言語・複文化を資本とした地域との関係性の構築から考えていくべきだという方向に変わっていった。

３．研究の方法

本研究ではまず、樺太サハリンの歴史的調査、残留日本人の証言収集などの文献調査を行った。またフィールドワークではライフストーリー・インタビューを行った。ライフストーリーは「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語」であり「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査の一つ」（桜井厚 2012）のことでもある。NPO 法人日本サハリン協会の協力のもと、北海道、東京で生活する永住帰国家族の方々に、ことばをどのように学び、使用してきたのかという大きな問いのもと、自由に語っていただき、それらをすべて文字に起し分析、考察を行った。一人につき、一回につき 1～3 時間、時期を空けて 2 回は行った。協力者の数は現在まで 20 人ほどである。

４．研究成果

（1）戦後サハリンを家族とともに生きたある帰国日本人女性の語り―複言語・複文化主義の観点から

本研究は、2000 年代、日本に永住帰国したサハリン残留日本人二世 B さんのライフストーリ

ー研究である。先行研究から1990年代に構築された「忘れられた日本人」「棄てられた日本人」というモデル・ストーリーを明らかにした。当時の一時帰国、または永住帰国を支えるストーリーとして大きな意義があったが、近年のサハリン残留日本人二世三世をこのモデル・ストーリーで語ることは難しいこと、さらには1990年代から現在に至るモデル・ストーリーの問題点として「特権的な単一言語観」と「民族と結びついたアイデンティティ観」があることを指摘した。

その上で、Bさんの語りを複言語・複文化主義の観点から考察した。その結果、ロシア語、韓国語、日本語が幼少期から現在まで様々な状況の中で学ばれてきたこと、新たに意味づけられ学び直されていることが明らかになった。そのようなことばの学びの過程でBさんは様々な他者と助け合い、支え合う関係性の中で生きてきたことも分かった。最後に、複言語・複文化主義は、多文化社会における自己や他者の新しい捉え方になりうることを示唆した。

（2）複言語・複文化話者としてのサハリン残留日本人―複言語・複文化における仲介という観点から

本研究は、日本に永住帰国したサハリン残留日本人2世Sさんのライフストーリーを複言語・複文化における仲介（mediation）という観点から考察することによって、Sさんの言語経験の意味を明らかにし、複言語・複文化における仲介の意義を論じたものである。北海道のA市に永住帰国した第2世代の一人であるSさんに、いかに言葉を学び使用してきたかを明らかにするためにライフストーリー・インタビューを行った。Sさんの言語経験の語りからは、Sさんが「サハリンの人々と日本社会をつなげる役割」「日本語話者とロシア語話者をつなげる役割」「日本社会にサハリン残留日本人の経験と記憶を伝える役割」という仲介者の役割を担っていることが分かった。また仲介活動はSさんのアイデンティティの更新につながったこと、それは言語や文化の境界にいるからこそ可能になることも明らかになった。以上の結果から、多文化共生社会における複言語・複文化話者の仲介活動の場作りの必要性を論じた。

（3）複数の言語資本による社会参加の形 ―サハリン残留日本人永住帰国者2世のライフストーリーから―

本研究では、日本に永住帰国したサハリン残留日本人が、ロシア語と日本語、時には朝鮮語という複数の言語資本を使用してどのように社会参加を果たしているのか、また社会参加を可能にする条件とはどのようなものか、北海道の地方都市B市に住むサハリン帰国者DさんとEさんへのライフストーリー・インタビューを通して明らかにした。

DさんもEさんも日本内外で暮らす家族・親族とトランスナショナルなネットワークを持ち、複数の言語でコミュニケーションを取っていた。Dさんは、ロシア語と日本語を資本に仕事を始め、B市でのネットワークを広げていた。さらに、日本社会における学歴、教養という文化資本獲得のための投資としてさらに日本語を学んでいた。一方Eさんは、教師になりたいという夢を、サハリンでは学校の日本語（文化）教員として、B市ではロシア語講師として実現することができた。どちらも日本語とロシア語を言語資本として、サハリン、B市それぞれの場で社会参加を果たしていたということができる。二人はロシア語と日本語という言語資本に加え、サハリン時代の文化資本を生かして日本での生活を充実したものにしてきた。

その背景にはB市とサハリンの文化的、経済的交流の豊かさがある。経済的文化的交流が多かったからこそ、専門知識を持つ通訳は必要とされたし、ロシア語を学ぼうとする人たちも多かったのである。B市には、ロシア語を受容する環境が整っていたと言える。サハリン帰国者であるDさんとEさんは、複数の言語資本によってネットワーク参加を試みると同時に、ネットワーク

参加を通じて、さらに自身の言語資本を豊かにしていた。そして、それがＤさんとＥさんのアイデンティティをより自身が望む方へ、あるいは豊かな方へと更新していることが伺えた。複数の言語資本を共に尊重しながら、複数の言語資本によって生活できる環境の構築がサハリン帰国者の日本での生活を支えているのである。

引用文献

① 桜井厚（2002）『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

② 桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂.

③ 玄武岩・パイチャゼ スヴェトラナ（2016）『サハリン残留―日韓ロ百年にわたる家族の物語』高文研.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 佐藤 正則、三代 純平	４．巻 19
２．論文標題 複言語・複文化話者としてのサハリン残留日本人―複言語・複文化における仲介という観点から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 言語政策	６．最初と最後の頁 19_1～19_16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57525/jalpjournal.19.1_19_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤正則・三代純平	４．巻 6
２．論文標題 戦後サハリンを家族と共に生きたある帰国日本人女性の語り―複言語・複文化主義の観点から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 語りの地平	６．最初と最後の頁 3－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐藤正則、三代純平
２．発表標題 複数の言語資本による社会 参加の形―サハリン残留日本人 永住帰国者２世のライフストーリーから―
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤正則、斎藤弘美、金サジ、三代純平
２．発表標題 語りと映像から考える永住帰国したサハリン残留日本人とその家族のことばと文化
３．学会等名 言語文化教育研究学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 佐藤正則・三代純平
２．発表標題 日本に永住帰国したサハリン残留日本人2世のライフストーリー－CEFRにおける仲介の観点から－
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤正則、斎藤弘美、金サジ
２．発表標題 サハリンをめぐる写真と語り―露・韓・日そして先住民が織りなす言語・文化の多様性に学ぶ「共に生きる」チカラ
３．学会等名 言語文化教育研究学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三代　純平 (MIYO Jumpei) (80449347)	武蔵野美術大学・造形学部・教授 (32681)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関